

会 議 録

1 附属機関等の会議の名称

平成30年度 第2回美里町生活支援体制整備協議会

2 開催日時 平成30年10月17日(水)午前10時から午前12時まで

3 開催場所 美里町駅東地域交流センター 大会議室

4 会議に出席した者

(1) 委員 小野俊次会長、佐藤美佳副会長、角田フミコ委員、伊藤秀司委員

(2) 事務局 美里町長寿支援課 伊藤博人、相原浩子、横山太一
美里町社会福祉協議会 浅野恵美、永沼威雄、高橋ゆかり

5 議題及び会議の公開・非公開の別

議題

(1) 報告

平成30年度児童による高齢者生活支援体験事業
「ぼくたち・わたしたち 暮らしのてつだい隊」について
地域福祉力UP情報交換会(北浦地区・中埴地区)について
体制整備の専門職部会(第2回多職種連携ワーキング)について
第2回介護サービス事業所連絡会について
支え合い情報紙「おげんきですか。第4号」について
生活支援コーディネーターの活動報告について

(2) 協議事項

日常生活圏域の共通理解と体制整備協議会・地区社協・専門職部会の関係性と役割について
地域福祉力UP情報交換会・専門職部会(第2回多職種連携ワーキング)からみえてきた地域課題について

(3) その他

今後の視察研修の予定について
介護予防推進地域支援事業について

会議の公開・非公開の別

公開

7 非公開の理由

8 傍聴人の人数

0人

9 会議資料

別紙のとおり

10 会議の概要

(1) 議題の審議結果又は今後の対応

<協議事項 >

日常生活圏域の共通理解と体制整備協議会・地区社協・専門職部会の関係性と役割について

前回のグループワークを振り返り、日常生活圏域における第1層～第5層までの各層と地域の活動や団体、組織等を整理し、合わせて自助・互助・共助・公助のそれぞれの範囲と考え方についての共通理解を図った。

今後、日常生活圏域の活動等や地域の支え合いを考える場合に、日常生活圏域の5層構造と自助・互助・共助・公助を意識して協議または取り組みをすすめていくこととした。

生活支援体制整備協議会・地区社協・専門職部会の関係性と役割については、生活支援体制整備協議会と美里町社会福祉協議会が設置する地区社協組織や会議等（地域福祉力UP情報交換会、美里町地域福祉活動計画策定委員会、多職種連携ワーキング）の関係性と役割について合意形成を行った。（【図1】参照）

今後、生活支援体制整備協議会と美里町社会福祉協議会が行う会議等で協議された事項について、各種団体や協議会委員が共有し理解し合い、それぞれが両輪となり支え合いの地域づくりを推進していく。

生活支援体制の整備を進めるため、生活支援コーディネーターの地域訪問による情報収集、会議等での情報共有、「おげんきですか。」等の広報誌を活用した情報発信機能を強化していくこととした。

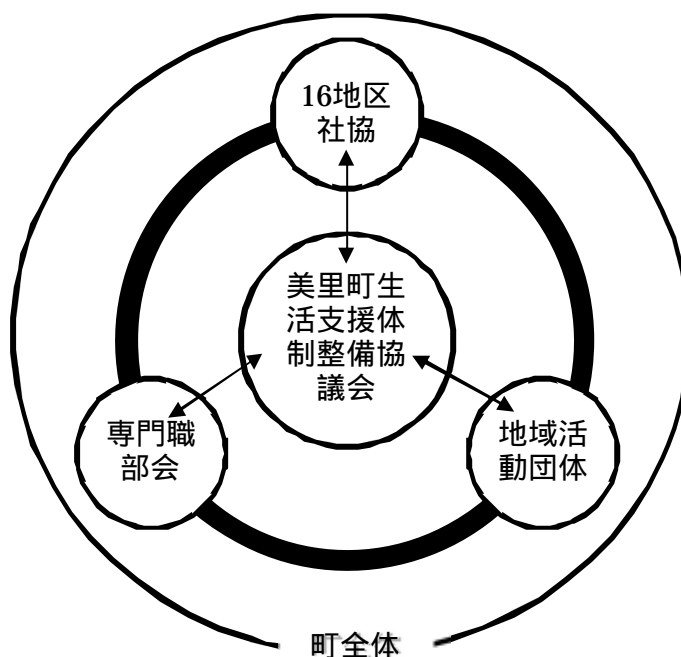
<協議事項 >

地域福祉力UP情報交換会・専門職部会(第2回多職種連携ワーキング)からみえてきた地域課題について >

地域福祉力UP情報交換会及び専門職部会(第2回多職種連携ワーキング)において、社会的孤立、制度やサービスの狭間の問題、お互いの理解不足や無関心が主な課題として挙げられ、解決と予防には地域の「つながり」が重要なキーワードとなることを協議した。

今後、支え合いの地域づくりや社会的孤立の予防のために、若い世代に向けた「つながり」の大切さや「つながる意味」について伝えていく必要がある。美里町社会福祉協議会をはじめとする各種団体等と連携して、世代を問わない事業・啓発の機会を検討し、事業実施とともに「おげんきですか。」等の広報紙による啓発も引き続き強化していくこととした。

【図1】生活支援体制整備協議会と地域関係団体との関係性



(2) 詳細な意見

高橋	これより、平成30年度第2回美里町生活支援体制整備協議会を開会します。本日も皆さまからご意見をお聞かせいただければと思います。それでは、1.開会の挨拶を美里町生活支援体制整備協議会の小野会長からお願いします。
小野会長	本日の会議は本年度2回目となりました。漠然とした話し合いの会議が一般的に多いように感じていますが、生活支援体制整備協議会では目標を明確にしていきたいと思っています。協議会の委員は限られていますが、今回もよろしくお願いします。 本日は次第のとおり、報告と協議事項があります。さまざまな意見をお聞かせください。よろしくお願いします。
一同	よろしくお願いします。
高橋	次に、2.署名委員の選出に入ります。どのような選出方法にするか、みなさんにお諮りします。
一同	事務局一任
高橋	それでは、角田フミコ委員、伊藤秀司委員のお二人にお願いしてもよろしいでしょうか。
角田委員・伊藤委員	はい。よろしくお願いします。
高橋	それでは、お二人にお願いします。 次に、3.報告に入ります。(1)平成30年度児童による高齢者生活支援体験事業「ぼくたち・わたしたち 暮らしのてつだい隊」について報告します。本資料1ページ、事業の実施要項をご覧ください。この事業は、小学生が夏休みを活用し、世代を超えて交流することを目的に企画しました。美里町社会福祉協議会が主催ではありますが、小野会長に相談し、生活支援体制整備協議会との共催で実施しました。本資料3ページが夏休み前に児童に配布した募集チラシです。事業は、3日の体験日時を設け、申込みがあった7月27日と8月10日の2日間実施しました。参加人数は、7月27日が5名、8月10日は4名です。当日は、駅東地域交流センターでオリエンテーションを行った後、町内の一人暮らし高齢者の自宅を訪問しました。小学生が高齢者と交流しながら、暮らしの困りごとを聞いてニーズ調査をした後に、小学生ができる範囲で実際にお手伝いを行いました。 体験した小学生による感想は、9月に発行した私のまちの地域支え合い情報紙「おげんきですか。第4号」の2、3ページに載せています。最初は緊張したようですが、誰かの役に立てたということで自信

	<p>が持てたり、仲良くなれたおじいさん、おばあさんができて良かったという声がありました。</p> <p>「てつだい隊」の開催目的として、地域で共に支え合う大切さについて小学生の保護者にも啓発したい思いもありました。事業終了後、保護者の方々からのアンケート結果が本資料4～6ページです。保護者からも好評で「こういった体験の機会があれば、また参加させたい」「ぜひ事業を続けて欲しい」という声が寄せられました。次回は冬休み期間に、同じような機会を設けたいと考えています。くらしのてつだい隊の報告は以上です。</p> <p>何か質問や意見はありますか。無いようですので、次に(2)地域福祉力UP情報交換会(北浦地区・中埴地区)について社会福祉協議会の永沼より報告します。よろしくをお願いします。</p>
<p>永沼</p>	<p>それでは本資料7ページをご覧ください。地域福祉力UP情報交換会について報告します。情報交換会は、つながりをつくっていく力、問題を発見していく力、支え合いの力の三つの地域の力をUPさせていこうと、地区社協の方々と町社協との共催で小学校エリアで毎年開催しているものです。</p> <p>北浦地区は8月27日に行いました。参加者は総勢49人で、地域住民、役場、地域の福祉事業所などから集まりました。テーマは「緊急度の高い課題と解決に向けて」です。「行政区内の課題と解決への方策は!？」というところでは、地域内の企業、事業所と連携した取組ができないかという声がありました。</p> <p>また、みんなが集まって地区内のことを話し合い、課題を発見し、問題や課題を共有しあえる場が必要という話がありました。行政区や自治会などの組織的なお茶のみ会のほか、小さい範囲で気軽に集まってお茶のみをする場やご近所同士のつながりの中でのお茶のみを大事にしていくという声もありました。孤立している方に、あなたのことを気にかけているよという言葉継続的に伝えていくことが必要という意見もありました。</p> <p>これらを進めて行くために、協力者の方々をどのように募っていったらいいか。世代を問わず協力者を呼び掛けていくということや、福祉教育を社会福祉協議会でも進めていますが、子どもだけではなく、世代を問わず地域の福祉を考えて学び合う場というものを意識していった方がいいという話をいただきました。</p> <p>続いて、中埴地区の情報交換会について報告します。9月5日に実施し、総勢51人が参加しました。昨年度まで中埴地区は健康づくり</p>

	<p>をテーマにしてきましたが、今年は北浦地区と同じ「緊急度の高い課題と解決に向けて」をテーマに開催しました。話し合いの中で挙がった意見は、地域内でS Sを出しにくい方がいるということでした。そういった方々が孤立しないよう、積極的に声がけをしていくという話がありました。</p> <p>また、困りごとが大きくなる前の初期対応が非常に大切であり、相談し合える関係づくりを日頃から進めるといった意見もありました。そのために、信頼関係を築くことが大切という意見が挙がりました。専門職と連携しながら見守りあう活動や、行事などでつながりづくりを意識すること、活動を地域内に知らせていくことが協力者を募っていく上でも必要になってくるという話がありました。</p> <p>今ある活動を工夫しながら意識しながら続けていくことがとても大切で、活動に取り組んでいる姿を地域に見せていくことの必要性も挙げられました。</p> <p>今後の情報交換会は11月下旬に不動堂地区で開催します。また11月下旬には情報交換会という名前にはならないかもしれませんが、青生地区社協で見守り協力者の方々との情報交換の場を調整しています。報告は以上です。</p>
高橋	<p>ありがとうございます。みなさんから質問や意見はありませんか。</p> <p>無いようですので(3)体制整備の専門職部会(第2回多職種連携ワーキング)について永沼より報告します。よろしくお願いいたします。</p>
永沼	<p>はい。本資料9ページをご覧ください。多職種連携ワーキングは、生活支援体制整備協議会と社協で行っている地域福祉活動計画策定委員会の二つの機能を併せ持った形で設置しております。構成メンバーは別刷りのA3判用紙をご覧ください。</p> <p>8月3日のワーキングの概要を報告します。第3次地域福祉活動策定の進捗状況と生活支援体制整備事業について、事前アンケートで回答いただいた地域生活課題に関する内容をもとに、地域の中でどんな問題が起きているか協議しました。地域生活課題に関するアンケートを集約したのが、本資料10ページです。項目ごとにまとめています。中身を整理しますと、共通した生活課題の一つは「孤立化」です。家族からも地域からも社会からも孤立している、または孤立するような状況を自分からつくっている方々が増えています。孤立の状況が見えていけばいいのですが、見えない形で潜在化している方も多くいます。</p> <p>問題というのは一つだけでなく、二つ～三つあったり、以前からの問題が複雑に絡み合って、多重問題というかたちで呼ばれています。</p>

「制度の狭間」の問題もありました。制度だけでは解決できないようなボーダーラインにいる方々が多く見受けられるという意見もありました。あとは「生活困窮」です。経済的な不安を抱えた方々、すべての根源になっているものと、それらの状況に陥っているのを考えると「社会的孤立」というのは、すべてに関わってきているように感じます。

こうした状況が、専門職の方々から事前アンケートで見受けられました。社協でも相談事業をやっておりますが、その中でも見受けられているところがあります。11ページ、12ページをご覧ください。誰もが地域の中で役割を持ちながら、支え合って暮らしていく地域共生社会の実現に向けて、国が考えを示しているところであり、それぞれの立場でどういった活動や役割が必要かをまとめたものです。

11ページ左側が、住民一人一人の個人、自助と呼ばれるもので、右隣は互助と呼ばれる自治会や行政区、地縁組織、小学校区、地区社協や老人クラブなどの当事者団体、福祉団体などといったところです。また、その右隣が、福祉・相談事業所等の専門職の範囲、それから一番右側が行政機関などということで、法的制度やサービスということで整理しています。やはり、見守りや声かけなど身近な範囲で声かけをしていった方がいいと専門職も思っていますし、相談を受けたりつないでいく、そして解決まで導けるような仕組みが必要という意見もいただいています。

12ページでは仕組みと環境づくりについて、具体的な取り組みも伺ってありました。専門職や事業所では、個々の事業所で、それぞれ事業を行っているところですが、一つの問題を横のつながりをもってネットワークを組みながら解決に向けて取り組んでいけるような体制をつくれれば良いということや総合的な相談体制の仕組みづくりにもつながってくると思います。

これらをもとに、当日はグループに分かれて話し合いを行っていただきました。優先度の高い課題はどのようなものがあるか、その課題に対しての取り組みに向けた方向性・予防策はどのようなものか、まとめたものが13ページです。

社会的な孤立の問題、これは見守りでなんとかできないかということや制度の狭間、そして情報収集・提供というところで、これは言い換えれば、福祉教育というものになってくるかと思います。情報を発信するだけでなく、いろいろな集まりの中で話題にして意識していくことが必要だということ。それから、福祉はこれまで対症療法的なものが多かったと思います。一つの問題に対して何かの制度やサービス

	<p>を当てていくというものや、何かが出たらそれに対して対応していくという考え方があったのかなと思います。それらを予防していくことが、これからの福祉には必要なのではというご意見もいただきました。</p> <p>では、予防とは何かというと、地域づくりであったり、福祉教育の場面での一人一人に対する福祉の意識の在り方であったり、つながりづくりであったり、そういったものが予防には必要で効果があるのではという意見もいただきました。また、どのような体系の仕組みで問題を解決し、予防して行くかという意見もありました。</p> <p>こうした意見を、生活支援体制整備協議会でも生かしていただきたいと思っていますし、社会福祉協議会の地域福祉活動計画の策定にも反映させて、情報共有しながら専門職の方々と一緒に住民の方々が話せる場を11月頃に作っていければと予定しているところです。以上です。</p>
高橋	ありがとうございます。みなさんから質問や意見はありませんか。
伊藤委員	<p>生活支援体制整備協議会の一員になってから、意識するようになったのは、やはり「孤立」と「見守り」です。私の周囲も高齢者家庭が多いのですが、この委員になってから意識的にコミュニケーションを取るようになり、おすそわけもするようになりました。</p> <p>例えば予防の観点から、私の妻が体を悪くしまして、私なりに体力をつけるのが大事だと考え、犬を飼いました。妻は昼と夜に犬の散歩をするようになりました。その結果、非常に体力がつき、医師が驚くほど体調が良くなりました。もう一つは、犬が小さいときから育てると、妻の母性本能を刺激したのか、妻の表情が良くなり明るくなりました。そのなかで、周囲と意識的にこれまで以上にコミュニケーションをとるようにすると、自動的にいろいろな情報が入ってくる。これが大事だなと思いました。要するに孤立を防いで、お互いに協力し合って生きていくという意識と積み重ねが大事だと思いました。シルバー人材センターの会員の相談も受けていますが、孤立を防ぎコミュニケーションをとって見守っていくことが大事です。今日やっていることに、間違いはないと思ったところです。以上です。</p>
高橋	まさに支え合いの地域が、自分の暮らしから広がっているということですね。
伊藤委員	そうですね。やはり自分の生活の場所から広げていくことが大事です。元気な高齢者がいるところから波及していくイメージ。近所とのつながりがどうあるべきか。その場所、その場所で考えてやっていく

	ことが大事だと思います。
佐藤副会長	そういった意識が広がれば、福祉教育の観点から子どもの頃からの環境づくりも必要ですね。
伊藤委員	その通りですね。
永沼	伊藤委員の話のなかの「犬の散歩」は健康づくりと介護予防、「犬の世話」は生きがい支援と役割ですよ。ご近所同士との関係づくりにもつながりますね。その方が自分らしく生き生きと暮らせるという、ポイントが見えました。
横山	こういう話をしている中で、委員さん自身気づいたことがあって、行動が広がっていったことが、とても大事だと思います。その気づきを、町全体に広げていくためにはどうすればいいか、その点を考えていきたいです。
伊藤委員	農家の方は「新米ができたから」と隣近所の人達におすそわけする。これがコミュニケーションだなと思います。そうすると、何か起きた時の助け合いにつながる。こういう時代だと最近つくづく身に染みて感じています。
佐藤副会長	専門職も孤立を防ぐために意識していますし、いろいろな会議の中でも地域づくりについて触れさせていただいているようなので、専門職の意識も変わってきたと感じています。会議の復命書を見ても、介護保険のサービスだけにとどまらず、専門職が地域に目を向けられるようになってきたと思います。
高橋	住民も専門職も一緒に地域づくりに向けて福祉力が上がっていくといいですね。続いて(4)第2回介護サービス事業所連絡会について、包括の横山さんより報告します。よろしくお願いします。
横山	8月21日に、介護サービス事業所の主にケアマネジャーの方々に集まっておいただき研修会を開催しました。先ほども住民と専門職が地域づくりや課題解決に向けて取り組んでいければいいという話がありましたが、その話をさらに進めていければという目的で開催した研修会です。今までは、ケアマネジャーの方々が介護サービスを利用したい人の調整をする役割でしたが、なかなかケアマネジャー自身が、地域のことがよく分からない、地域づくりといっても実際にやっているのはAさん、Bさんの個別支援だけでした。また、生活支援コーディネーターが、そもそも何をやっているかケアマネジャーには分からないことが課題になっているという思いがありました。一方ではケアマネジャー自身も介護サービスのデイサービスやヘルパーの方々とつながるのも大事なのですが、それ以外の地域の支え合いを含めた様々な

ものを理解し、つながることで住民がより良く地域で暮らせるということを考えていく必要があると思います。ケアマネジャー自身に地域の支え合いって何だろうという考えや生活支援コーディネーターである高橋ゆかりさんと必要に応じてつながってもらうために今回の研修会を企画しました。

本資料14ページからが、研修会で使った資料です。宮城県全体の地域支え合いを推進する委員会の委員長である、東北こども福祉専門学院の大坂先生にお越しいただき、その人らしく地域で生きるためには、私たちはどんなことを考えたらいいのかというところを、改めて地域づくりの目線からお話いただきました。ケアマネジャーや介護サービス事業所の職員が、生活支援コーディネーターの活動を知る機会が今までなかったため、コーディネーターの高橋さんから一年間の活動報告をしていただきました。研修会後のアンケートをまとめたものが本資料43ページです。

改めて意識がなかなかできていなかったけれども、地域のつながりや支え合いというのが大事という意見や実際にケアマネジャーが普段支援していく中でもご本人が地域でどのように暮らしているのかというところを、まず知るというところも大切だという意見もありました。また、生活支援コーディネーターの仕事や地域の支え合いについて初めて知る機会にもなったので、必要に応じてケアマネジャーなどが地域支援をしている生活支援コーディネーターとつながって、デイサービスやヘルパーだけでなく、いろいろな支え方ができるという意見が多かったです。

今回の研修会は考え方や活動内容を理解してもらう狙いで企画したので、これから先も様々な企画をしながら、専門職として地域で活動している方と、その地域の住民の方や生活支援体制整備協議会が手を取り合って、住民の方と輪を描きながら支えるイメージで地域づくりを進めていければいいと感じたところでした。以上です。

高橋

こちらの研修会には小野会長と角田委員にも参加していただきました。ありがとうございました。みなさんから質問や意見はありませんか。無いようですので、続いて(5)支え合い情報紙「おげんきですか。第4号」についてご報告します。今回は専門職のお宝紹介のページでは、シルバー人材センターの伊藤委員にご協力いただきました。ありがとうございます。今回ですが、発行後に1件クレームがありました。表紙の写真が後ろ姿で「ちょっとどうなの?」という電話が社協の事務所に入りました。クレームではありましたが、裏返せばそれ

	<p>だけ見てくれていると、前向きにとらえました。またその一方では、情報紙を見た40代の男性からお話を聞かせてほしいという連絡をいただきました。みなさんのところには反響などありましたか。</p>
浅野	<p>役場の秘書室で聞いた話です。住民から「おげんきですか。」のような広報紙を作ってほしいという声があったそうです。「おげんきですか。」は、笑顔の写真や見やすい文字などで、内容が分かりやすいのだと思います。</p>
伊藤委員	<p>その通りですね。文字が細くなると生理的に読まないですね。</p>
小野会長	<p>区長として毎月、地区内に広報紙などの配布物を届けています。数ある配布物の中でも、「おげんきですか。」の表紙写真はカラーで見やすく、目立ってとてもいいと思います。</p>
高橋	<p>第5号は12月1日発行を予定していますので、ご協力よろしくお願ひします。</p> <p>続いて(6)生活支援コーディネーターの活動報告です。本資料46ページをご覧ください。地域を訪問して、地域の活動やいろいろなつながりを教えていただいています。南郷パークゴルフ愛好会は、任意のグループです。こちらは毎日、午前と午後に活動しているとのことでした。参加は自由で、メンバーはその日によって幅があるそうですが、いきいきと活動している姿が印象的でした。休憩の時間もその日によって長くなったり短くなったりと臨機応変に活動しており、長く続けているポイントのように感じました。毎日の「今日行く」「今日用事がある」ことが介護予防になっていて、社会参加につながっていることを学びました。</p> <p>47ページは大口行政区ラジオ体操の活動です。こちらは「おげんきですか。第4号」に地域のお宝として紹介しました。大口行政区のラジオ体操は、今年の4月から大口集会所で始まりました。家族以外に「おはよう」とあいさつすることが楽しみという言葉聞き、参加者の中には一人暮らしの方もいるので、外に出ることで地域とつながるきっかけになっていると学びました。もともと顔見知りであっても、ラジオ体操を通してつながりが再構築されていると分かりました。</p> <p>続いて老人クラブ「北浦第三長寿会」です。“ペタツ競技”という変わったレクリエーションをしている、ということで訪問しました。吸盤がたくさんついているボールを、的に向かって投げて得点を競う競技です。もともとは、町社協の浅野課長がレクリエーションの講師として北浦第三長寿会の集会に出向いて実践したものを、自分たちでもやってみようということで新しいレクリエーションを取り入れなが</p>

	<p>ら、活動にメリハリをつけて会員同士楽しみながら介護予防に取り組んでいました。こういったレクリエーションは一人だとなかなかできませんが、仲間がいることで楽しみながら体を動かした結果、介護予防にもつながるといことが分かりました。</p> <p>三つの活動から、これからの介護予防は身体機能の向上だけでなく、社会参加も介護予防の大前提だということをおぼせていただきました。今後も地域の活動を教えていただきながら、私自身も勉強していきたいと思っています。委員のみなさんも地域の情報などありましたら教えてください。よろしくお願ひします。こちらについて何かご意見ありませんか。</p>
浅野	<p>昨年は集いの場ということで、お茶のみ会を中心に取材して回りました。今年のテーマは介護予防です。高齢になるとつながりが切れることが多々あり、社会性も低下します。そのため、身体機能の向上だけでなく、いろいろな集いの場を通して社会性を向上することが、介護予防につながるのかなと感じています。</p>
高橋	<p>地域の活動の結果が介護予防につながるとお思いますので、今後も地域へ足を運びたいとお思います。それでは、4 . 協議事項に入ります。ここから進行を小野会長にお願ひします。</p>
小野会長	<p>報告が六つありましたが、協議事項については、ざっくばらんに話し合いながら、引き続き進めたいとお思います。(1)日常生活圏域の共通理解と体制整備協議会・地区社協・専門職部会の関係性と役割について事務局からお願ひします。</p>
高橋	<p>はい。(1)日常生活圏域の共通理解と体制整備協議会・地区社協・専門職部会の関係性と役割について、本資料48ページをご覧ください。地域福祉活動計画の資料を一部抜粋したものがこちらの資料となります。前回、第1回生活支援体制整備協議会の際にワークショップを行い、町内の様々な組織を1～5層圏域に分類するためカードを貼ったものをまとめました。</p> <p>町全体の第1層としては生活支援体制整備協議会、消防署、警察署、医療機関、住民バス、包括支援センター、農協、シルバー人材センター、商工会などが該当します。第2層については、医療、年金、介護保険などに代表される社会保障制度やサービスが考えられ、民生・児童委員協議会、町社会福祉協議会、老人クラブ連合会、介護保険事業所、福祉サービス事業所なども第2層に位置づけました。第3層は、16地区社協、地区民生委員協議会、地域婦人連絡会議、ボランティア、PTAなどが位置づけられました。第4層は、66行政区、自治</p>

	<p>会、町内会、婦人会、農家組合、自主防災組織、消防団、防火クラブなど、行政区・自治会・町内会の地縁組織による地域福祉活動の場が該当します。隣近所や班、共同作業組織、友達なども第4層に入るのかなというところがありました。第5層は「自分自身や家族」としています。</p> <p>資料を見ていただいて、いかがでしょうか。第3層に含まれる組織については幅が広いため、分け方が難しいのですが。</p>
小野会長	他の層と重なり合う部分が非常にあると思います。
高橋	日常生活圏域をこのようなイメージで捉えながら、みなさんと共通理解をすすめていきたいと思います。
小野会長	共通理解として、この図のような捉え方でよろしいですか。
伊藤委員	シルバー人材センターは、今年の4月から農村環境改善センターの指定管理をしています。そのなかで、ボランティアの人達と共同でいろいろな行事を行っています。先日の日曜日は、村田町にハイキングに行きました。今度は小学生と作ったさつま芋で変わりごはんを作る予定です。小学生や高齢者の方々と、いろいろな行事を行いながら活動を進めていますが、そういった意味ではこの図は的を射ているのではないかと思います。
小野会長	第1層にシルバー人材センターはありますが、第3層の小学校区・地区社協にも関連がありますし、重なるところはありますけれども、共通理解として分かっているならいいね。あくまでもこの組織はこの層と決めるものではない、ということですね。
伊藤委員	そうです。枠を超えて、いろいろ協力し合っているということです。
浅野	一つだけ問題提起します。自助の「一人ひとり(自らのチカラ)」の説明に、自分自身・家族とあります。孤立や社会的排除につながっていくのですが、自助を考えた時に「人の力を借りずに自分で生活する」という考え方があると思います。震災以降、「助けられ上手」というキーワードができました。人に力を借りながら、自分で自立して生きるということも大切です。例えば「何かのサービスを使いながら」「隣人におすそわけを頂きながら」自分の力で生きるということもあると思います。自助の部分を自分自身・家族と言い切ってしまうのはどうかと思いました。
小野会長	表現の方法ですか。
浅野	はい。説明の仕方です。
伊藤委員	周囲の人、近所の人など、入れるのはどうですか。

浅野	そこは互助にもなりますが、自助という言葉には制度やサービスの申請などで、自分の自己責任で何とかしなさいと切られてしまうところがあります。一般的に自助は自分自身・家族と説明されますが、何かうまく説明できればと思います。
伊藤委員	実際、周囲の人たちといろいろ助け合いながらやっていく時代になっているから、やはり周囲の人、近隣の人など入れてもいいのではないのでしょうか。自分一人で生きていくのは難しい時代になってきていますね。
浅野	互助と自助の曖昧なところを何と表現したらいいかと思います。
小野会長	一つひとつを絵にしたらいいのではないのでしょうか。
伊藤委員	家族体制が核家族化になっている。自助の部分に、浅野課長の考えを入れていいと思います。
浅野	自助は「自らのチカラ」だけではないですよ。
角田委員	実際のことではなく意識のことだと思います。意識として、まずは自分の力で立つ。だけど、立ちきれない部分もあるから、そこは上手に周りから力を貸してもらおう。そして、一人でいても役に立てることがありますよね。隣近所の人とお茶飲みした時に、人生経験もあるし話題も提供してくれる。話をたくさん聞いてくれるし、褒めてくれる。たった一人にいる人であっても、何らかの力があると思います。
伊藤委員	互助のところには身近な支え合いと書いてあるから、いいのでは。
浅野	自助のところの、右側の四角い箱の中に「自身のもつチカラで」と書いてあるので、「自身のもつチカラや周囲のチカラを借りながら」というように付け加えればいいのではないのでしょうか。
角田委員	ただ、そのまま付け加えると「課題を解決する」と続くので、難しいですね。
伊藤委員	第5層になってくると自分に関わってきているわけですから、現実的ですね。第1層とは環境がまったく違います。やはり第5層が重要なのでしょうか。
浅野	「自分が持つチカラや周囲のチカラを借りながら」とか。この説明が入れば、他の力を借りてもいいと思えるのではないのでしょうか。
伊藤委員	ただ、自助と互助と分けて書いているからね。自助のところは、このように書くしかないでしょう。
小野会長	確かに、書き方次第で互助に入りますね。
浅野	互助と「周囲の力を借りる力」が大切です。互助はみんなで支え合おうという関係だけれど、自分が自ら人の力を借りる、助けてということも自分の力・SOSを出す力、そうすると、自分だけでは何とも

	<p>ならないが、SOSを出すことによって周りの力や言葉に背中を押されることもあるから、そこを何とか美里町らしく表現できないかと思います。一般的には、この表のとおり自助・互助・共助が説明されています。でも、もっと自分の弱さを出してもいいのではと私は思います。一人で頑張れと言われても、頑張れない人がいるから困っているのです。</p>
伊藤委員	なるほど。
高橋	そうですね。ここは、自分一人の力だけではなく、周囲の力を借りたり、SOSを出す力も含めた表現で説明した方がいいですね。
浅野	資料右側の説明分に全て「課題を解決する」と書いてありますが、タイトルが「地域の支え合い」なので、「の力で支え合う」というように説明してもいいのでは。説明文に「解決する」と書いてあると、いつも何か問題があるように感じてしまいます。
小野会長	私もそれは思いました。「課題を解決する」だと堅苦しさもあります。
浅野	「支え合う」「生活する」という表現の方が適していると思います。
佐藤副会長	「生活する」の方がピンとくるかもしれません。
小野会長	<p>みんな問題があるわけでないし、解決しなくても良い問題もあるかもしれません。安心して生活できればいい。頭の中では分かっている、そのあたりの表現の仕方ですね。</p> <p>その他、ございませんか。無いようなので続いてお願いします。</p>
高橋	<p>はい、次に生活支援体制整備協議会と地区社協、専門職部会の関係性と役割について少し考えていきたいと思います。先日、事務局側で事前に打ち合わせを行った時に、(ホワイトボードに板書)真ん中に体制整備協議会があります。その周りに6地区の地区社協、専門職部会、そして地域のボランティアの方々などを含めた地域活動団体があります。これら全体を囲むのが町全体です。こういったイメージなのかなという話がありました。</p> <p>体制整備協議会で出た意見を、生活支援コーディネーターや社協職員が、情報や問題提起として地区社協や専門職部会へ提供します。このような形で相互に発信したり広めていくことについて、事務局でイメージを共有しました。専門職部会と地域活動団体がお互いに情報交換したり、専門職部会も地区社協と情報を共有したり、相互に情報を発信したり広めたりして、働きかけていくというイメージです。</p>
浅野	事務局では、この体制整備協議会が中心にあり地区社協や専門職の方にもPRする大切な場だと確認し合いました。委員さん方はどうですか。

伊藤委員	そんな風に思っていませんでした。
浅野	今のところ体制整備協議会は高齢者のことを中心に話をしていますが、地区社協や専門職、地域活動団体は高齢者に限って取り組んでいるわけではありません。高齢者だからする・しないという話ではなく、地域全体の5年後・10年後・20年後をイメージしながら話をしていると思います。とても大切な話し合いの場だと思っています。
小野会長	(ホワイトボードの図の)体制整備協議会が真ん中にあるわけではないと思いますが、16地区社協に我々が行くことはあっても、専門職部会で話し合いを聞くことはない。地域活動団体もたくさんある。その中で体制整備協議会を知らない人もたくさんいると思います。そのあたりへどのように波及していくかですね。
浅野	体制整備協議会の赤い丸だけ見ると責任を感じるかもしれませんが、見えないところで町社協や役場が裏で支えています。先日、専門職部会をやったときに、専門職が話していることを他の人達にも見てもらう努力をしなければいけないと感じました。だから体制整備協議会の委員の方々にも来てもらうなど、いろいろな人がオブザーバー的に話を聞いてもいいと思います。地区社協、専門職それぞれの話し合いを分かりあえないと波及までなかなか行き着かないと思います。
小野会長	体制整備協議会は、周りから見れば新しい団体だと思います。まずは名前を覚えてもらわなければいけないと思います。
相原	今年3月に体制整備協議会のイベントを通して町民のみなさんにお披露目しました。あのようなイベントがお知らせする場で、特別な会議に参加しなくても、例えば小野会長なら行政区長として地区内の会議で協議会活動を伝えたり、JAさんであればケアマネジャーやヘルパーさんたちに、おすそわけしている人がいないか探してみても声掛けしたり、そういったつながりから広げていくことも大事。この協議会での話し合いを、地域や所属団体に持ち帰ることを意識して、丁寧に広めてもらえると、ちょっとずつ変わってくるのかなと思います。
佐藤副会長	(ホワイトボードの)矢印で示された通り、わたしたちが動けばいいのかな。意識して行ったり来たりするイメージで。
伊藤委員	私、(ホワイトボードの)図を見た時、ずっと話し合ってきたことが、社協の方から情報発信されていると分かりました。
浅野	今日の冒頭、伊藤さんが話した奥様の事例は、もうあちこちで歩いて歩きますよ。個人名は出さないまでも。委員自らの家庭からね。
伊藤委員	やっぱり、話を戻しますが、生活環境を変えてあげるのが大事だと思って。私が仕事に出た後、妻は家で一人ですから。犬を飼ったこと

	で、精神的にも体力的にも肉体的にも変わりました。
相原	このお話を、私たちここで聞かせていただいたことを、伊藤委員がシルバー人材センターの会議などで伝えていただければ、(ホワイトボードの) 矢印の一つになるかもしれない。そういうことですね。
永沼	シルバーの会員さんもお仕事で、依頼は一般世帯からが多いと思います。例えば、これから雪かきや植木の選定などが考えられると思います。シルバーの会員さんたちも、仕事をしながら専門職と同じように家庭の状況や問題を垣間見ることができるのかなと思います。
伊藤委員	あります、あります。
永沼	そういった情報をこの協議会の話し合いの場に持ってきていただくこともいいのかと思います。
伊藤委員	<p>60歳になる女性の方が、第一線を退いてシルバーの会員になりました。その入会説明で話を聞くと、60歳でハローワークに行ったら、全然仕事がなく、それでシルバーに来たそうです。生活環境を見ると、ご本人と娘1人です。これは生活がかかっていると思い、私も必死になって探して、ちょうど毎日働ける場所があったので安心しました。昨日も、入会説明を聞きにきた高齢者が、会社がつぶれてしまって働き口がないと言っていました。こういった駆け込みが結構あります。</p> <p>平成16年にシルバー人材センターを立ち上げた時に、近い将来にシルバー人材センターはハローワーク的な役割を担うと理事に伝えました。大都市圏で定年退職した人たちが再就職のためにハローワークに行くと「シルバー人材センターに相談して」と言われる。最近は地方もそうなっています。</p> <p>シルバーは、高齢者の生活を支える機関になってきていると実感しています。高齢者世帯の生活様式は変わってきています。それが何を意味するかというと、やはり核家族化でしょう。高齢者世帯の家庭が多い。こういう時代だからこそ、おすそわけなどのつながりが大事で、何かあった時にいろいろ協力し合えらと思います。小さいところから始まっていかないと、だめだと思います。</p>
小野会長	はい。では体制整備協議会と地区社協、専門職部会の関係性については、ここまで話したとおりで進めるということで、よろしいですか。
一同	はい。
小野会長	それでは、次の協議事項(2) 地域福祉力UP情報交換会・専門職部会(第2回多職種連携ワーキング)からみえてきた地域課題について事務局から説明をお願いします。

<p>高橋</p>	<p>はい。先ほどの報告にもありましたが、地域課題のキーワードは、やはり「孤立」だと思います。伊藤委員からも話があったように、つながりが大事だと、みなさん気づいてきているのかなと思いました。今年的生活支援体制整備事業は「介護予防」をテーマに進めています。例えば、コーディネーターの活動報告でもありましたように、大口のラジオ体操の場合、介護予防は手段であって、目的はつながることです。委員さん方の中でも、つながりについて何か感じていることはありますか。</p>
<p>小野会長</p>	<p>前にも話をしたことがあります。つながりといえば、避難訓練運動や安否確認もある。広い範囲での安否確認は今までやってはいたけれど、3～4軒くらいの隣近所で班を作って、避難訓練をするときは、その3人のうちの1人がチーフになる。そしてチーフが班長に連絡する仕組みです。これは避難訓練や安否確認の時だけでなく、普段生活しているなかで意識して過ごす。お年寄りもいるし、小学生もいるかもしれない、お互い意識しながら声を掛けあう。そのようなことがつながりだと思います。</p> <p>何かあったら助け合うことをみんなが日頃から意識する。その他は地域でいろいろなことをやっていると思います。今、話をしていたラジオ体操にしても、グラウンドゴルフにしても、カラオケにしても、地域のお祭りにしても、まずは参加して楽しむ。楽しめるグループ活動がとても大事だと思います。だから町社協も地域に来て出前講座をやってくれる。</p>
<p>伊藤委員</p>	<p>良いことを言ってくれました。先日、町長と話をする機会がありました。最近の災害を見ていると、集中的なゲリラ豪雨により、西日本で3日間に1000ミリの雨が降ったそうです。そのくらい降ると、どこの河川もだいたい氾濫するそうです。町の防災マップはあるようですが、実際のきめ細かな避難方法を考えなければいけないのではと話しました。特に、中埴地区を流れる江合川は、北上川に合流するため増水しやすく氾濫する確率が高くなります。町の防災マップはあるが、実際にそうなった時にどうすればいいかわからないという声を多く聞く。そのマップが果たして、現実に即しているのかも考えつつ避難の仕方をきめ細かく話していかないといけないのではないかと話しました。</p> <p>こうした提案を、協議会から行ってもいいのではと思います。今、小野会長が言ったような3～4軒が一つになって見守りをしながら助けあうという役割をつくりながら、その人たちが核になって平日頃の</p>

	生活を見ていく、そういった形をとれば、ものすごく目の細かい命を守る体制がしてくれるのではと思います。
小野会長	防災マップがあればいいというものではないですよ。私の行政区には、川沿いに福祉事業所の施設があり河川が氾濫したらどうしようという不安をいつも持っています。地区内のお寺の和尚に話をして、寺を避難所にしてほしいと話しました。実際の災害時は、マップを見るよりも地区内の関係性があればいいですよ。
伊藤委員	そうですね。中埴地区は山がない地域です。どこに避難するか分からない。
角田委員	私の家も浸水地域です。鳴瀬川が決壊したら、1階の扉の上ぐらいまで水に浸る想定です。避難場所は近くの中学校ですが、中学校が統合して地域から無くなったらどうなるのでしょうか。また、逃げる公共施設は分かるけれど、夜間は早く鍵を開けてくれるのかわかりません。
伊藤補佐	役場で対応するという事になってはいますが、これまでの災害を見ても初動はそんなに迅速には動いていないです。
小野会長	今は災害の情報が早くて危険度も分かるから、避難も早めにするように行政でもやっている。
浅野	先日、宮城県主催の防災指導者研修会に私と永沼が呼ばれて行ってきました。大崎市は、学校体育館の鍵をコンビニに置いてもらっているそうです。地域で一番先に気づいた人が、コンビニに行って鍵を借りて入ってもいいそうです。
角田委員	町で実際にこうなったら、どのように動くか訓練しているのかしら。
伊藤委員	災害時の避難の詳細は無いから、このような課題はここからしか発信できないのかなとつくづく思いました。
浅野	例えば防災管財課と情報交換をすとかね。
小野会長	そういった場も大事ですね。それがつながりだと思います。
伊藤委員	小野会長が言った通り、4～5軒が安否確認をするような取り組みがとても大事だと思います。
角田委員	区長さんによって対応が全然違うので、小野会長（区長）のように意識が高ければ近所でチーム等を作るけれど、ありきたりな訓練が多いように感じます。
永沼	体制づくりの一つとしては、避難しなければならない状況になった時、健康福祉課管轄の災害時要支援者を民生委員さんが避難誘導する仕組みがあります。この名簿は、健康福祉課と民生委員さんが持っています。この仕組みがあっても、実際に避難誘導できるかどうかは試してみないと分からないところです。

浅野	どこに避難したらいいかも分からないですよ。
永沼	水害か、地震か、想定する災害で避難場所も変わってきますからね。
浅野	今、避難準備も発表が早いです。防災指導者研修会の参加者は、ほとんど学校の先生でした。学校の使い勝手は先生が一番分かるので、とにかく初動が大事なため、役場職員が来るまでの間は、授業中であれば学校の責任においてやりたいとは思っていると話していました。
小野会長	役場職員というのも防災管財課だけが動くわけではないですから。全員でやると思うのですが、そのあたりの話はしなければいけないでしょうね。
角田委員	地域が、団地のように家が並んで平面ならいいですが、あちらの外れからこちらの外れまで、坂を越えて山を越えてみたいな地域だと、(避難所まで)「連れてきてください」と言っても…。ただ、自主防災組織ができたので、各班長さんがいるから、班長さんには動いてもらうことを期待しています。
小野会長	はい。地域福祉力UP情報交換会というのは6地区の地区社協すべてでやっていますか。
永沼	6地区の地区社協でやっていただきたいという話を、地区社協連絡協議会で話をしています。今年は北浦地区で8月、中埜地区で9月に終了し、不動堂地区は11月20日(火)午後、駅東地域交流センターで行います。地域福祉力UP情報交換会という名前でやれていない地区は本小牛田地区と青生地区の二つで、青生地区については見守り協力者の方々が一堂に会する場面があるため、そこで見守りしながら感じる地域課題にはどのようなものがあるかと、お聞きすることを昨年から実施しております。本小牛田地区は、地区社協の役員会にもお邪魔していますが、なかなか実施まで至っていません。このほか、今年度は南郷地区でも情報交換会を行う予定です。
小野会長	そこで、地域の課題が見つかるわけですよ。
永沼	そうです。行政区ごとにどんなことが起きているかというのを話していただいて、南郷地域はこういうことなのか、小牛田地域はこういうことなのかと、ワンペーパーにまとめようと思っています。それぞれ行政区でも課題などが違います。
小野会長	行政区ごとに地域の課題が違うから、共通の話題も難しいですよ。(2)の協議事項は以上でよろしいですか。
高橋	一点だけ、つながりという部分で、高齢者だけでなく若い世代のつながりも、私自身どうなのかと思う部分がありまして、インターネットなど顔の見えないつながりも今はあります。その若い人達について

	もつながりについて啓発していけたらいいかなと思っています。
角田委員	若い世代、子育てをしているPTA世代のお母さんたちは、宇宙人だなと思います。例えば、今度 をやりますので申し込んでくださいと伝えた時に、子どもの氏名や学年を書いて申し込みますよね。当日、連絡なく欠席する人がたくさんいます。私が若い頃は、急用ができたリ具合が悪くなったりしたら、友達を通じて連絡を入れるとか、手段を考えて連絡をしました。
浅野	2025年で団塊の世代が後期高齢者になるっていう話はしています。2040年問題とって、この頃には支え手が少なくなります。支え手になる若い世代が今のうちにつながりの実感や、つながって楽しかった経験がないまま、2040年に若い世代一人が高齢者一人を支える時代になったときに、一人も支えられなくなると思います。生活支援体制整備を考えるときに、若い人へのアプローチこそが重要かなと思います。高齢者が後々、安心して暮らせる地域にしていくためには、若い人へアプローチしていかなければと思います。
小野会長	若い人って何歳ぐらいですか。定年前の人ですか。
浅野	稼働世代ですかね。世代を問わずということです。
小野会長	その世代が、いかにこの問題に、福祉のことを考えていくかということですね。難しいですね。
浅野	そこをやらないと。
小野会長	若い世代は我々と考え方が違いますから。
浅野	地域行事だけではなく社協でやっている福祉教育などを通じて、子どもの頃から家庭や学校や地域の中でそういうことを意識して育てていかないと宇宙人ばかりになっていくと思います。
角田委員	今の若い世代は自分が優先だから周りは考えない。自分はたまたま暇だから、ついでにやるかという発想であって常に自分しかない。自分の家族しかない。そんな発想が多いように感じます。
小野会長	今、若い世代はグループ活動をしていますか。
佐藤副会長	スポ少とかでしょうね。
高橋	PTAとかですかね。
小野会長	野球チームをつくるとか。
浅野	経験がないですもの。
小野会長	それは教えられるものではないですよ。常に私たちはそのようなところで育ってきたのかもしれないけれど。
浅野	青年団などでね。
小野会長	私の若い頃は、野球チームやバレーをしたり、その仲間が今も一緒

	<p>にやっているわけですよ。今の若い人たちは、PTAバレーをやっているというぐらいなのかな。好きなことのグループってないのかな。そういったつながりを、我々が作ってあげようといっても難しい。</p>
永沼	<p>稼働世代の人達や私も含めて、今日行くところと、今日用事があるところとして職場というのが基本にある。例えば家や隣近所で話さなくても、会社に行って話をする、誰かと話はできている。65歳以上の一人暮らしの男性が、一週間のうちに一回も（誰とも）話さない確率は約30パーセント。二週間のうちに一回も（誰とも）話さない確率は約15パーセントという数字が出ています。7人に1人が一週間や二週間のうちに誰とも話さなかった男性がいます。私も男性ですけど、昼間は働いていれば誰かと話せるが、土・日曜日は静かにしているかもしれないです。仕事が無くなった途端にぱたっと孤立が始まっていくのかなと思っています。地域デビューする際にスムーズにいけばいいですが、うまくいかない方が出てくると思います。</p>
小野会長	<p>地域デビューは一人ではなかなか難しいですよ。50代の方が4、5人いればできそうですが。我々の場合、60歳から70歳近い人たちが中心となって行政区の役員を務めています。そこに、若い人に入ってもらいたくても入らないですよ。</p> <p>そして、今の若い人たちは頼まれればやる。うちの地域は、お祭りで手伝ってくれる人を、班長を通じて名前を書いてもらいました。若い人は手を挙げてくれない。「なぜ、お宅の息子さんは来ないの」と質問すると、「私が言っても分からないから、区長さんが言ってください」と答えが返ってきた。区長からお願いされれば「行くよ」という。なぜお祭りをするのに、お願いしなければいけないのか。男性だけでなく女性も同じです。</p>
浅野	<p>古い歴史がある地域と、駅東のように新しい団地は真逆で、「駅東ゆとりーとフェスティバル」を駅東地域交流センターで10月14日に開催し、スタッフは60人、来場者が500人近くになったそうです。今後20年後、30年後には駅東も今の大口や志賀町、山の神のようになるということで、この駅東の地域づくりに携わってきました。そういう意識で若い人たちも出てくる。大変だけれど、面白かったという経験も積んでいくのだと思う。古いところは脈々と受け継がれているものがある。</p>
角田委員	<p>古い人がいるから、入りづらいということもありますね。</p>
小野会長	<p>不思議なことに、役員がだんだん辞めていくと、新しい人が出てくるものだよ。私も何もしていなかった。何もしていなくても、区長に</p>

	<p>なったら、やらなければいけないことがたくさん出てくる。自然とリーダーになっている人が、人を集めてくるわけです。自然と出てくる。若い人どうしたらいいかなと、心配することはないと思います。まず、私たちが辞めれば、誰かが出てくる。</p>
浅野	<p>その姿を見ているからですよ。例えば横山さんたちが、今の区長さんたちの姿を見ているから、いつか区長になるかもしれません。</p>
伊藤委員	<p>この前、新聞に良いことが書いてありました。私も生活支援の考え方はこれでいいのかなと、ふと思いました。今、人生100歳時代だそうです。政府からは、定年が70歳という話がでてきている。そうなってくると、全てがこれまでの考え方と違ってくる。</p> <p>考え方を徐々に変えていかないと。人の支えも含めて、どう生きていくか根本的に変わってくると思います。その辺も念頭に入れてやっていかないと。だから逆に言うと、70歳過ぎたら辞めろというのは酷です。元気に働ける人は、働くということですよ。</p>
小野会長	<p>70歳ぐらいになってから、生きがいを見つける人がたくさんいる。</p>
伊藤委員	<p>そうそう。定年70歳時代がくる。元気なうちは働いてくださいという話だから。そういうなかでの社会福祉というのを考えていくということです。</p>
小野会長	<p>若い世代というけれど、何歳のことを指すのか分からない。100歳時代になれば、70歳でも若い世代に入ってくることもあるということですね。若い人を取り込んでと思うかもしれないけれど、自然と出てくるのではないのでしょうか。</p>
佐藤副会長	<p>会議に参加すると、「あなた、若いからお願い」と言われるのが嫌で、なかなか参加したくないという人もいると思います。</p>
小野会長	<p>行政区の役員になりたくないというのが、そこかもしれませんね。会に参加すると声をかけられたり、発言しただけですぐに役を任せられたりもしますからね。</p> <p>次に入ります。5.その他(1)視察研修についてお願いします。</p>
高橋	<p>(1)視察研修についてです。A3判資料をご覧ください。「第3回宮城発これからの福祉を考える全国セミナー」ということで、昨年度は角田さんにご出席いただきました。今年は11月16日に開催ということで委員の皆さんもぜひご出席いただきたいと思いますので、ご検討いただければと思います。また、宮城県内の市町村へ視察も考えているのですが、まだ日程や場所は決まっていません。決まり次第、連絡します。以上です。</p>
小野会長	<p>次に(2)介護予防推進地域支援事業についてお願いします。</p>

高橋	こちらは町社協主催で、介護予防の観点からラジオ体操のDVDを制作中です。
小野会長	まだ出来ていないのですか。
高橋	はい。まだ、いろいろな団体のラジオ体操を撮影しているところです。今、25団体くらい撮り終わりました。もうそろそろ終盤です。今日、委員さん方にご協力いただいて、ラジオ体操のビデオを撮りたいと思っていたのですが、天気が悪いため、次回のご協力よろしくお願いします。
浅野	25団体、延べ500人近くの方々にご協力いただいています。DVDは1回、2回見れば終わりかもしれませんが、このプロジェクトに小さいお子さんはじめ500人の方々が関わってくれたプロセスに意味があると思っています。間もなく河北新報に掲載予定となっています。3月までの間に音も入れて、DVDとして各区長さんたちに配布して、よろしければお使いくださいとお伝えします。
高橋	最後に、大和町の方が作った支え合い通信です。ご覧ください。
浅野	仙台白百合女子大学の志水先生から電話をいただいて、3月に開催した「お茶っこ会だよ！全員集合！！」の写真と内容について、福祉関係で有名な中央法規から発行予定の書籍に、美里町の事例を使わせてもらいたいとおっしゃっていただいて、写真を提供しております。
伊藤委員	すごいですね。
高橋	「MIYAGI まちづくりと地域支え合い17号」の裏表紙にも「お茶っこ会だよ」の記事が掲載されています。地域支え合い情報の方にも中組の自宅サロンの記事が載っておりますので、お時間ある時に見ていただければと思います。
小野会長	今日はいろいろな話し合いがありました。これで第2回生活支援体制整備協議会を終わりたいと思います。よろしいですか。
高橋	それでは閉会の挨拶を佐藤副会長よりお願いします。
佐藤副会長	今日は、活発なご意見をいただきありがとうございました。先ほどの（ホワイトボードの）図を見ながら、私としては専門職の方を代表して参加させていただいているわけですが、それぞれの団体で確認してきた課題を、取りまとめる仕組みをきちんと意識してやっていかないと、なかなか矢印のように動けていけないなど、私自身、思ったところです。みなさん、各組織で矢印の役割を担っていただけるよう、ご尽力賜りますようよろしくお願いいたします。閉会の挨拶とさせていただきます。今日は大変お疲れ様でした。
一同	ありがとうございました。

上記会議の内容に相違ないことを証するため、ここに署名します。

年 月 日

委員 _____

委員 _____